

JR総連は6月3日に第40回定期大会を開催し、本紙No.1046で指摘した通り、文書指示に対する不履行等を理由に、JR東海労に対する制裁を行うべく、「統制委員会」の立ち上げを行った。JR総連通信等によれば、統制委員会の設置は「満場一致」で承認されたとのことだが、「JR東海労第41回定期大会記録集」には、“JR東海労選出の代議員2名は反対しており満場一致ではない”が、“票決からは外されてしまった”旨を反論的に記載している。

さらにJR東海労は、「JR総連統制委員会に対するJR東海労としての見解」（2024/7/15付及び8/4付）を公開し、関西のみならず、「JR東海労」として統制委員会に反対する立場であることを明確にし、「JR総連 vs JR東海労」の構図が浮き彫りとなった。

“JR総連 vs JR東海労”問題の行方：上 定期大会を経てJR内の革マル派の対立を露呈

ところで、本年1月のJR総連第46回中央委員会では、現在JR東海労中央執行委員長を務める加藤誠氏が、「革マル派と自認する浅野孝氏が結成に関わったJRひがし労の堀口真明氏とJR東海労OBの京力正明氏が内通していた」旨を暴露したが、雑誌「ACCESS」（2024年7月上下巻）によれば、JR貨物労組の高木康之前中央執行委員長も同様の発言を行ったようだ。高木氏は、本年6月のJR貨物労組第40回定期大会の委員長挨拶において、同労組中央本部と関東地方本部の内部対立である“総団結問題”に触れ、同労組内への堀口氏の介入を危惧し、「党派の介入について危惧するのは元JR東海労高崎地本のH氏（＝堀口氏）の影響です。彼が所属する『ひがし労』は革マル派に影響された人物が作った組織」と述べると共に、「（H氏は）JR東海労OBのK氏（京力氏）とのつながりも明らかとなっています」と言及し、JR東海労には、「JRひがし労」「革マル派」の影響があるという加藤氏の発言を補強した形となった。

JRひがし労を警戒するJR総連⇄謎の「M組」を警戒するJR東海労

一方、JR東海労側の文書にも気になる記述がある。それは「M組」という言葉だ。前述“定期大会記録集”には、代議員の発言として「M組という党派」「自称『労働者の党』と言われるM組が（JR東海労とJR総連に）支配・介入している」「M組に支配されているJR総連」などの文言が記載されている。「M組」とは一体どういう組織なのだろうか。

前述の定期大会記録集からは、JR東海労OB会は、実はJR東海労のJR総連に対するスタンスに批判的であることが読み取れる。実際、福島一三OB会長は現役役員に対し、“JR総連との関係性について冷静に対処して欲しい”旨の呼び掛けを行った。これらに対し、JRサービック労働組合の柳楽関委員長や新幹線関西地方本部の代議員は「OB会は“M組の立場”であり、勘違いしている」旨の批判を行い、特に柳楽委員長は、傍聴参加していたOBの「舟山氏」らを名指しして、他OBにもOB会の立場をわきまえるよう、檀上から迫っている。

革マル派43名リストに記載あり…「M組」とは“マングローブ”のことか!?

実はJR東海労新幹線関西地方本部が公開した「真実を明らかにする！No. 3」の【別紙1】（2024/3/11付）には、この舟山氏と見られる「舟山守夫」氏の名前がある。この文書では、JR総連近畿地方協議会の津崎修議長は、舟山氏から、2023年11月のJR総連近畿地協第35回定期委員会開催前に、“JR東海労の動きに警戒するように忠告を受けた”旨の内容が記載されている。JR東海労からすると、さしずめこれが「M組の介入」に該当するのだろう。

さらに驚くべきことに、自らも革マル派に関係していたと告白したJR東海労本部の元役員らが2006年に公開した革マル派とされるJR総連関係の役員等43名のリストには、舟山氏と見られる記載があるのだ。ジャーナリストの西岡研介氏は、このリスト等を基に詳細な取材を行い、「マングローブ」と呼ばれる革マル派活動家が、JR総連や加盟労組の役員として組織と運動をコントロールしていることを、著書「マングローブ」で明らかにした。これらから推測するに、JR東海労が敵視する「M組」は、JR総連内で影響力を行使する革マル派活動家、すなわち「マングローブ」らを指すのではないか。

以上の通り、JR総連とJR東海労には、それぞれに革マル派の介入が強く推認される状況にある。その上で互いにこの介入を批判する姿からは、JR内の革マル派が対立を起こし、「JR総連 vs JR東海労」という対立を引き起こしたことが分析される。JR総連・加盟労組内では、JR東海労へのJRひがし労を通じた革マル派の介入が語られ、JR東海労の定期大会では代議員が「M組」なる隠語を公然と発言し共有される様は、これら組織の闇深い性質を表している。